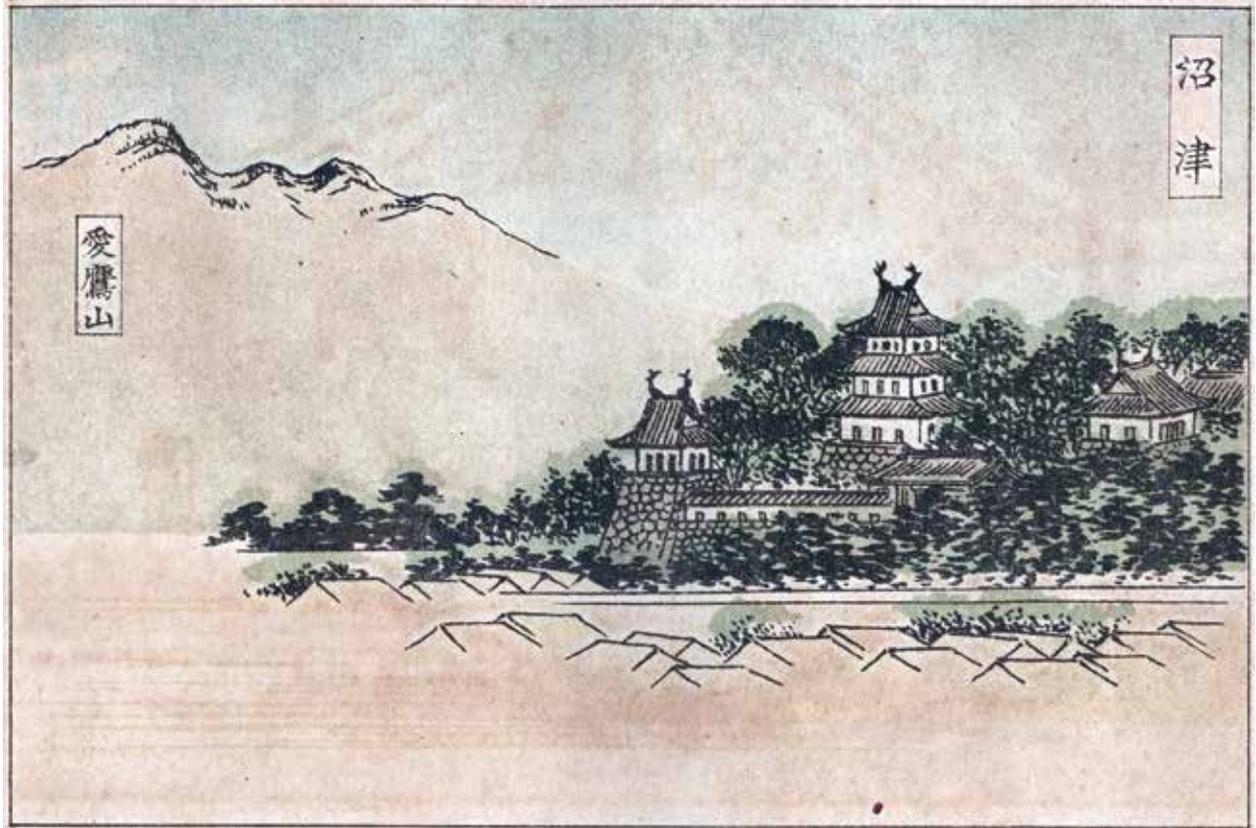


資料館だより

Vol.48 No.4 (通巻241号)

2024.3.25(年4回発行)



『東海道名所図会』沼津 一立斎広重 文禄堂書店版
明治42年(1909)発行

吉田町の榊原公幸さんに提供していただいた古い画帳の中から沼津城が描かれている一枚を紹介します。

表紙に「東海道名所図会全」と記されるこの画帳は、版画を印刷したと見られるもので、濃い青と薄いピンクの二色刷りのようです。

手前に町屋の屋根、後方に愛鷹山が描かれ、中央から右に木立に囲まれた城の建物群が見えます。屋根に鯨を載せた三重櫓、同じく鯨を載せた平屋の隅櫓、右端にも少し大きな平屋の櫓、狭間が並ぶ多門、大手門と見られる切妻屋根などが見えます。

明治時代後半にこのような城郭建築が残されているとはとても考えられませんが、かつての城下町沼津のイメージはこのように見られていたのではないかと推察されるような作品です。

この情景とそっくりな風景が描かれている浮世絵版画があります。幕末に発行されたとされる「東海道一と眼千両」の沼津です。二代目歌川広重と豊原国周の合作とされるこの版画は、上部に広重の風景画、中央に国周の美人画の黄瀬川の亀鶴を配したもので、後方



『東海道一と眼千両』沼津・黄瀬川亀鶴(部分)
歌川広重・豊原国周 慶應3年(1867)

の風景は、この名所図会とほぼ同一です。

明治6年11月に静岡県から出された「沼津・田中廃城建物入札」の入札物件の目録には「四号本城石蔵、内古擬宝珠八ツ、鯨四ツ共」とあり、本城石蔵に鯨が4体収納されていたことがわかります。「一号本城建物」がどんなものか、屋根にこの鯨が置かれていたのか、「本丸多門」や「本丸内書生寮」とあり、本丸と本城の使い分けは何を意味するのかなど沼津城の建物は不明な点がまだまだ多く残されています。

駿河湾の漁

川口 洋司さんの漁話

獅子浜の網組…川口組

前号まで、網組での漁が休みとなる時に個人や少数で行うコショウバイと呼ばれる小規模の漁についてお話頂きました。今号より網組として川口さんが行っていた漁についてお話頂きます。コショウバイが副業とするならば、網組としての漁は本業になります。

川口組がいつごろに成立したのかははっきりしていません。川口さんから当館へご寄贈いただいた川口組に関する文書に『発動汽船控帳』（大正7年（1918））という川口組の収支をまとめた帳簿があり、大正時代中期には成立していた網組だったことがわかります。『静岡の民俗』（沼津市歴史民俗資料館編 沼津市教育委員会 1977）には、「大正7年ごろ、川口組が最初に発動機船を求め…」とありますが、それを裏付けるようにこの帳簿には大正7年に焼津から発動機船を購入したことが記載されています。また、大正9年（1920）には大正7年に購入した発動機船を売り、志下の秋山鉄工所で製造した発動機を焼津の船大工飯田茂作が製造した船に取りつけて発動機船を新造しています。

川口組は獅子浜に居住している3家がツモト（網組を設立した時に中心となって出資した家）となって設立された網組で、その中でも川口さんの家はモッタテ（川口組設立のきっかけとなった家）と言い伝えられています。この3家は対等で上下関係はなく、1年交代で順番にその家の家長が川口組のオヤカタ（網組の代表者）として網組の収支の管理などを行う網組の責任者を担当していました。大晦日はオヤカタを務める最後の日となり、オヤカタの家で川口組の宴会が開かれた後、川口組の帳簿類が収められた帳箱を翌年のオヤカタの家へ運ぶということが行事となっていました。そして、翌日の元日になると新しいオヤカタの家に川口組の人たちが集まって世話人や船頭といった役職を決める選挙を行い、新しいオヤカタによる川口組の1年が始まります。

川口組は最盛期に80人近くの乗組員がおり、静岡地区でも大規模な網組の一つでした。乗組員の多くは親戚関係という縁によって加わっている人が多く、獅子浜の集落の人たちを中心に構成されています。ツモト側の人間も乗組員の1人となり、皆、対等の関係になります。

川口組が所有するアミフネ（網船）は代々長宝丸という船名が踏襲されています。この「長宝」という名前がつく長宝組という網組が内浦地区の小海にあります。この二つの網組には関係があり、小海の網組が川口組で使用していた船を購入した時に、それまで組名がなかった小海の網組は船名の長宝丸にちなんで長宝

組となったという話が伝わっています。先述の大正9年に売却された発動機船の付記には、「前発動船小見之人ニ石油一本付テ売渡ス」とあります。「小見」は小海の誤記と考えられ、この記録は長宝組の名の由来となった川口組との発動機船の取引のことと思われる。

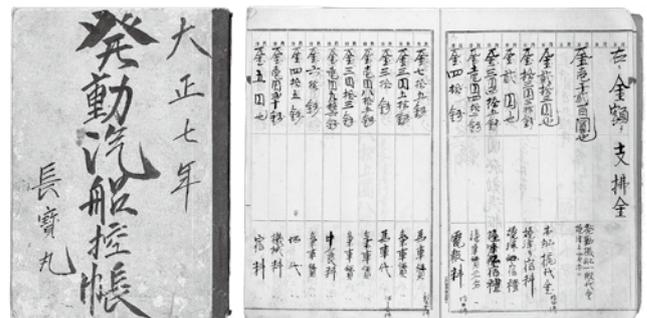
川口さん自身は弥助丸という船を所有しています。弥助丸は長宝丸とは違って川口組所有の船ではありませんが、ヒブネ（灯りをつけて魚を集める船）として川口組に提供することがあります。その場合、川口組から燃料費等の経費が支払われます。川口組に提供される船には他にも川安丸という船があり、この船も川口組のツモトの1家が所有する船です。川口さんが所有する弥助丸という船名は川口さんの家の屋号にもなっており、獅子浜の集落内では弥助丸と言えば川口洋司家となります。また、沼津における漁師間のやり取りでは船名でのやり取りが多く、「川口洋司」という名前よりも「弥助丸」と言った方が通じます。

前号までのコショウバイのお話でも少し触れましたが、満月の日を中心に1週間はツキヤスミと称して川口組での漁は休みとなります。満月の日は月明かりが普段よりも明るいため魚に網を感づかれて逃げられやすいからという理由で休みになっていました。また、ツキヤスミの期間に給料の支払日があり、1か月間の川口組の水揚げを元に給料が支払われ、その日の晩はオヤカタの家の座敷で宴会となります。

川口組での漁は春から秋までが中心です。冬は魚が来たとなれば漁を行います。基本的には漁獲が少ない時期であるため川口組としての漁はお休みとなり、乗組員は川口組で使用する網の修繕を行ったり、川口さんのようにコショウバイを行ったり、工事現場のような短期間の労働を行っていました。漁期になると川口組の乗組員として漁に従事します。

大正時代・昭和時代と続いてきた川口組ですが、乗組員の減少や高齢化、また、漁獲量の減少により昭和54年（1979）頃に解散となりました。

（話：川口洋司氏 昭和17年生まれ 沼津市獅子浜在住）



写真：『発動汽船控帳』大正7年（1918）
沼津市歴史民俗資料館所蔵

『ふるさと沼津覚書』

加藤 雅功

■香貫・我入道編 その11 香貫と楊原の地

●「香貫」の地名考 香貫(カヌキ)は難解な地名と言える。「香貫郷」は鎌倉期～南北朝期の郷名であり、中世に発生の起源がある。地名の「カヌキ」はコーカン(香貫)と呼ぶのが一般的で、北九州に分布が多い。未開地を指す「空閑」のコガ(古賀・古閑)に由来するようで、空地を開拓した「空閑」の意とされるコガ(古家)やコーガ・クガ(古閑)と同様に、コーカンは「空閑地」を指し、村落をも意味する。

明治末から昭和初期の講演や雑誌掲載内容を編集した『地名の研究』から糸口を紹介する。関連する地名として「カウゲ・カガ・カヌキ」について語源を論じた柳田国男はカウゲ(コウゲ)やカヌカの地形と草地の共通性、カガの地形と原野・草原とコガの空閑地、カヌカ(カノカ)の芝生・草生地を関連付けている。

ただしカガはカウゲ・カヌカと通じるというが、語源的にも音韻的にも無理がある。水利の悪い、土地条件などで開発できなかった傾斜地が採草に利用されたものと見られる。またコゲ(搔・欠)のほかカガ(欠・処)、カヌカも接頭語のカ+ヌカ(抜)とすれば崖崩れなどの崩壊地形・浸食地形を言うか。そうならばカヌキも同様に、他の語の前に付く接頭語のカ+ヌキ(抜・貫)として崩壊地形や浸食地形を指すものと思われる。

同様に、カヌ(加納・枯野・狩野)の「カヌー」の関係から「開墾地」を意味し、中世の開墾に絡むものか。元々コーカン(香貫)の音読から「カヌーチ」「カヌーキ」の訓読に変わって定着したものであろう。

一方で地名の「香貫」の漢字に対して、カヌキではなく誤読の結果、カツラと呼んでしまって「カツラの里(香貫郷)」が登場した。カツラ(香貫)の里は誤りで、後に訂正されるが、誤用が目立っていた。

荒廃地のコーゲ(高下・荒毛)から崖・傾斜地のカガ(加賀・鏡)の方言が生じ、カガミの芝草地や自然堤防等の高燥地が語源か。カカミ(香々美)からカヌキに転訛した可能性や鏡作部との関連も否定できない。

カガミツクリ(鏡作)がカツラで、香貫地区と鏡作郷に比定する説さえ登場した。いささか強引だが、鏡作りの工人集団が玉作郷に居住して楊原神社と関係するとし、延喜年間まで三島の地にあり、後に下香貫の宮脇付近に移ったと言う。『増訂豆州志稿』や『静岡県史(旧版)』の鏡作郷の比定地は下香貫である。

確かに香貫の訓は「カヌチ」から「カヌキ」で定着することとなるが、もう一つの類似名称として「金持」がある。香貫のカヌチが「カネチ」に訛り、その当て字の「金持」の読みがカナモチ・カネモチになったという可能性である。平安末期から中世にかけての金持

荘の中心は金岡側(日吉・山王台付近)にあり、古文書から愛鷹山南東麓の沼津市街地北部、沢田方面も金持荘の荘園域であったことが知られる。香貫地区はカナモチの荘(金持荘)の一部であり、「金持荘沼津村」の記録もある。『駿国雑誌』の「名寄牒」に依れば、沼津の周辺や日守方面まで金持荘は24ヶ村から構成され、香貫側も当然含まれていたものと見られる。

●楊原村と「式内社」比定地 ここで「式内社」について若干触れよう。元禄5年(1692)の図の模写、文政11年の絵図では黒瀬道沿いに「浅間社」が位置する。その後『延喜式』登載の「式内社」、伊豆国田方郡の玉造水神社の比定地となるが、別な文政11年(1828)の絵図では「玉造」とすでに記してあり、狩野川の河畔、渡津地点を重視したものか。黒瀬の玉造神社は「式内社」の玉作水神社、『伊豆国神階帳』の「玉作の明神」に比定される。なお文久元年(1861)の『駿河志料』では「古木生茂り、神佐備たる森なり、玉造郷なる故に当社を然称す」とあり、『和名類聚抄』の駿河国駿河郡玉作郷との関連を指摘している。

旧浅間社のように、狩野川縁の大石の築造部(石室の一部)が露出していた塚などを代表に、平地にも宇藤井原の不動明王を祭る大塚古墳など、多くの円墳が群集していた。数の多さを九十や九十九で表した群集墳で、この「古跡の地」として知られた香貫地区だが、その後は耕作のために乱掘され、盗掘も多くて古墳は激減してしまった。また古墳時代終末期の横穴古墳も同様に内部が盗掘されてしまっている。

次に字宮脇の楊原神社について見ると、『延喜式』の「神名帳」に登載された「式内社」、伊豆国田方郡の楊原神社に比定する説がある。現に村名を香貫ではなく「楊原」に変更して拘った楊原村がある。楊原神社は明治以前に香貫明神・大宮明神と呼ばれて、「大宮神社」とも称された。山寄りの宇柳原に元あり、戦国期の永禄年中に焼失し、天正年中に現在の宇宮脇に



楊原神社(大正10年『静岡県史蹟名勝誌』)

移され、南側の字馬場の集落はその社家が中心に成立したと言う。旧社地が三中北側付近に推定される狭小な柳原より、広域の八重原でかつ隣接する字八重原の方が楊原への変化が関わりそうで、ヤキハラ(八重原)、ヤナキハラ、ヤナギハラへと転訛したものか。柳の木の植生による地名のほかヤナ+ギで、斜面や土手を意味するヤナに接尾語のキの関係が考えられる。

明治以降に三島市田町の「楊原神社」(旧楊原寺)、『伊豆国神階帳』の「やきはらの明神」(田方郡)に対して、駿河郡の「大宮神社」、大宮明神・香貫明神(現楊原神社)の比定地争いがある。伊豆国田方郡とすれば、『延喜式』の式内社は当然田方郡側に求めるべきで、香貫以南の地が駿河から一時田方郡となったという説もあるが、その事実は希薄である。また狩野川以南が元々伊豆国田方郡で、中世のある時期から駿河郡(駿東郡)となったとする狩野川国境説も出て来た。異説の折衷

案に『増訂豆州志稿』がある。古くは香貫に鎮座し、その後香貫が駿河国に編入されたので、三島市中島に移され、元和年間に將軍上洛用の「御殿」を設営したため現在地に遷宮したと言う。しかし最初は田方郡とする根拠や移設の動機に対する説得力を欠く。

牛臥山東麓の大朝神社は以前「山宮山神社」で、山宮大明神や別称の潮留大明神と呼ばれていた。『延喜式』の「式内社」で伊豆国田方郡の大朝神社、『伊豆国神階帳』の「おほあさの明神」への比定説がある。楊原神社・大朝神社・玉造神社も合わせて、同じ香貫地域内に3社が存立するという特異性もあるが、明治期の式内社比定の問題である。大朝神社も伊豆市白岩側の「大宮神社」に比定され、検討すべき余地が未だ残る。なお楊原神社から浜降りの道が南側に真っ直ぐ伸び、字西村の「鳥居崎」の地に「一の鳥居」がかつてあった。

資料館からのお知らせ

社会科見学の昔の道具体験

本年度もたくさんの小学校から社会科見学に来ていただきました。

社会科見学では館内の展示、主に昔の生活道具を見学していただくだけでなく、昔の生活道具を実際に使って見て、その道具についての昔の人々の知恵や工夫、使用の大変さなどに触れられるような体験の機会を取り入れてきています。

コロナ感染の拡大防止のため、密着しないで指導できる、感染影響が少ない火打ち金と火打石による火おこし体験だけに限定していましたが、コロナの沈静化が進む中で、新たに石臼による粉挽き体験も加えることとしました。



石臼体験の様子(米粉を挽く)

開館50周年を迎えます

歴史民俗資料館は、昭和49年12月1日に「沼津市歴史民俗資料陳列館」として開館しました。本年12月1日で50周年を迎えます。

古民家などを一部改修して民具などの展示も行えるようにした歴史民俗資料館がほとんどだった当時、鉄筋コンクリート造りで新設された館で、全国的にも珍しい施設として注目を集めました。

設備も全館空調、ハロンガス消火設備、ガス滅菌装置などを取り入れた当時の最先端を行くものでした。

ただ、狭い建物の中に多くの機能を詰めすぎたことや短い期間で計画・建設され、運営面で検討ができなかったことなど問題点もありました。

沼津市歴史民俗資料館だより

2024. 3. 25発行 Vol.48 No.4 (通巻241号)

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL:<https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp